木　一九八三a、b〕

(5) 注(2)一二頁

(6) 注(2)一二頁

(7) 伊藤龍平「ツチノコの本地」〔二〇〇〇〕は「ツチノコ」「ノヅチ」という名称の下に集まってきた想像力の産物として興味深いものがある。

(8) 「妖怪」の「創作」という問題は近世期の特徴として高田衛とアダム・カバットが言及している〔高田　一九九二　カバット二〇〇三〕。

参考文献

アダム・カバット「『創作』としての妖怪」小松和彦編『日本妖怪大全』二〇〇三年　小学館

大島建彦「あだ名と世間話」『上田盆地』二二号　一九八三年

伊藤龍平「チチノコの本地」『世間話研究』第一〇号　二〇〇〇年

京極夏彦「通俗的『妖怪』概念の成立に関する一考察」小松和彦編『日本妖怪学大全』二〇〇三年a　小学館「モノ化するコト」東アジア恠異学会編『怪異学の技法』二〇〇三年b　臨川書房

小松和彦「妖怪と妖怪研究―序論に代えて―」小松和彦編『妖怪学大全』二〇〇三年

佐々木厚子「村人のあだ名(一)―新潟県佐渡郡相川町高瀬の例―」『西郊民俗』一〇一号　一九八三年a「村人のあだ名(二)―平左衛門タコをめぐって―」『西郊民俗』一〇二号　一九八三年b

佐藤健二「新語論の発想」関一敏編『現代民俗学の視点　民俗のことば』一九九八年　朝倉書店

大門哲『潟』研究の可能性―あるいは『民具』学の不可能性―」神奈川大学常民文化研究所編『民具マンスリー』一九九年二月

高田衛「『百鬼夜行』総説―序にかえて」高田衛・稲田篤信・田中直日『鳥山石燕図画百鬼夜行』一九九二年　国書刊行会

常光徹・小宮弘美・欠端幹仁・赤井武治「浄法寺町の妖怪―アクドボッポリー」野村純一編『浄法寺町昔話集』一九八二年　荻野書房

中島恵子「世間話」大田区社会教育部編『大田区の文化財　第二二集　口承文芸』一九八六年

柳田国男「妖恠名彙」『民間伝承』三巻一〇号　一九三八年、『柳田國男全集』二〇巻　一九九九年　筑摩書房

山田厳子「産科書のなかの『血塊』」『世間話研究』一〇号　二〇〇〇年

和歌山民話の会編『高野・花園の民話』一九八五年

(やまだ・いつこ／弘前大学)

書評

山下　欣一著『南島民間神話の研究』

島村　恭則

1.

本書は、南島（奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島）における「民間神話」について、その存在様態、機能、意味内容、生成メカニズムなどを検討した総頁数五三七頁におよぶ大著である。『奄美のシャーマニズム』（一九七七年）、『奄美説話の研究』（一九七九年）に続く著者の一連の著作として、一九九八年に『南島説話生成の研究』が刊行されたとき、まだそれらの著書に収められていない「民間神話」関係の多くの論文があった。評者は、それらが一日も早く一冊にまとめられることを切望していたが、あれから五年、ついに本書の刊行が実現された。これで、著書の三十年に及ぶ南島シャーマニズム、南島民間説話、南島民間神話の研究、いわば〈山下南島民俗学〉の全貌を手にすることが可能となったのである。

本書において「民間神話」とは、民間に口頭で伝承されている神話のことであり、これは、琉球王府編纂の正史類に記載された「琉球王朝神話」と対置されるものである（一一四頁）。著者は、民間説話の話者が、研究者によって設定された神話／伝説／昔話といった分類枠組みを意識してこれを語っているわけではないという実態を重視し（四九五頁）、既定の枠組みを民間説話群にあてはめて分類することをいったん留保する。その上で、南島の民間説話群には、「由来譚的傾向」「起源を語ろうとする傾向」「真実の話への傾斜」といった特色があること（一六四頁）をふまえ、実態把握のための新たな概念として「民間神話」を定立させ、これを主題化したのである。

著者自身が指摘しているように、「南島民間神話」研究の嚆矢は、大林太良による研究（「記紀の神話と南西諸島の伝承」『国語と国文学』四三―四、一九六六年、など）に求められる。しかし、その問題提起を受け継ぎ、三十年の歳月をかけてこの領域の研究を深化させた第一人者は山下欣一であり、本書はその集大成である。そしてそこには、長年の研究蓄積にもとづく、「民間神話」研究についての独自の視点と方法の成立が見られる。

それは、例えば、説話の起源論や伝播論、比較研究を第一義的な目的とするのではなく、南島のシマ社会で語られる資料を、当該シマ社会における生活の文脈の中で分析すべきだとする一貫した主張に顕著であるし、また、膨大な民間説話の資料群から「民間神話」を抽出、確認するための手順として示された、

(1)地域をなるべく限定しつつ、民間説話の資料群全体を検討対象にする。

(2)特に伝説については、その構成要素に留意する。

(3)次の三区分を基本にして検討する。その際、それらの複合状況にも留意する。

①国土創造（巨人天地分離・楽園状態・楽園喪失など）

②人類の起源（兄妹漂着始祖など）

③農耕の起源

(4)「起源説話」にも十分留意する。

といった明確な方法論的要約（四九五頁）などにもこれをうかがうことができる。

2.

本書は、序章および六篇の本篇から構成されている。第一篇「南島民間神話研究の歩み」では、前出、大林太良の研究を当該研究分野の出発点と位置付けた上で、その後の代表的研究者の研究を、それぞれ、「始原への探求」（＝福田晃）、「言葉の呪力への洞察」（＝谷川健一）、「近代相対化への視点」（＝古橋信孝）、「神話的叙述と位相」（への着目＝藤井貞和）、「ケンムン・キジムン―原神話的存在」（への着目＝酒井卯作）、「琉球王権神話考究」（＝末次智）、「現状」（＝遠藤庄治、伊藤幹治、小島瓔禮、畠山篤、真下厚、原田信之、佐渡山安公、松浪久子、丸山顕徳、居駒永幸、上原孝三）、「中国・福建と神仏習合との関係」（＝原田禹雄）のように要約、評価し、末尾の原田によって開拓されつつあるような問題を今後の重要な課題領域だと論じている。

第二篇「南島民間神話の実態的研究」では、「民間神話」に見られるアマミキヨ・シネリキヨ系神名呼称、オモイマツガネ説話（日光感精説話）群、犬祖神話的説話群、兄妹始祖神話、御嶽起源説話、ユタの呪詞、などの存在様態や機能、村落におけるシマ建て神話と儀礼との関わりなどについての分析を展開している。

第三篇「『琉球王朝神話』と『民間神話』」では、『琉球神道記』『中山世鑑』『中山世譜』などに記載された神話や、『おもろさうし』記載の神話的な歌謡など、「琉球王朝神話」をとりあげ、それら文献神話の内容の相互関係や、それらと「民間神話」との関わりについての考察を展開している。

第四篇「宮古・八重山諸島の御嶽起源説話群」では、宮古諸島と八重山諸島の御嶽起源説話の資料を集成・分析した上で、その成立基盤にシャーマニズムが存在することを指摘。さらに、その指摘を論証すべく、宮古諸島のシャーマンの成巫と神話生成に関するメカニズムを解明しようとしている。

第五篇「南島民間神話の周辺」は、前篇までが、「民間神話」の存在様態や機能、生成メカニズムなどを扱っていたのに対し、民間神話の内容それ自体の解釈を試みている。すなわち、奄美のユタの呪詞中に見られる「聖名」（神名）をめぐる語りの内容に、聖性の獲得、「無から有へ」といった、〈秩序の生成〉とでもいうべき意味を読み取る。また、奄美のノロの悲劇的死を語る説話群の内容を、シマ共同体におけるノロの境界性、聖別性をめぐる民俗論理の観点から読み解いたりしている。本篇は、本書の全体からすると「背景」「周辺」もしくは「補論」的な位置にあたるものかもしれないが、〈様態論〉〈機能論〉〈生成論〉とは別の、神話の意味内容の読解（いわば〈意味論〉）という、もう一つの問題への果敢な取り組みとして注目される。

第六篇「総括と展望―まとめにかえて」は、さらなる資料の充填を行ないながら、南島説話群における「民間神話」の重要性、および「民間神話」生成メカニズムについて、それぞれ再確認が行なわれている。

3.

本書は、前述のように、著者による一連の著作中の最新作であるが、本書を通読し、また、これまでの大著群を通覧したとき、われわれは著者の三十年にわたる問題関心の持続

と実証の深化に驚かされる。

著者は、『奄美のシャーマニズム』において、すでに、ユタが唱えるオモイマツガネその他の呪詞を詳細に記録し、これをめぐる課題の提示を行なっていた。そして、同書刊行の二年後、『奄美説話の研究』においては、シャーマン・呪詞・説話の相互影響関係を集約的に論じ、奄美の「起源説話」群における「民間神話」的性格を指摘した。

その際、注目されるのは、この『奄美説話の研究』の末尾（「要約―総括と展望」）において、早くも宮古諸島の御嶽起源説話をとりあげ、これをシャーマニズムとの関わりで検討する必要性を示唆（文字どおり「展望」）している点である。

そして、その問題提起が、こんどは、一九七九年（初出）に、「比屋御嶽（宮古伊良部島）起源説話の問題」（改題して第四篇第一章）として主題化された。そこでは、宮古諸島の御嶽起源説話の資料集成にもとづき、より説得力ある形で、御嶽起源説話へのシャーマニズムの関与の可能性が論じられたのである。しかも、さらにそれが一九九四年（初出）の「宮古シャーマンの成巫と神話形成の問題」（改題して第四篇第三章）へと展開し、実在のシャーマンの成巫過程と神話生成プロセスの検討による当該問題の論証へと結実するのである。

著者は、シャーマニズム研究を開始した頃、奄美大島名瀬市の陋屋で男性老ユタが呪詞オモイマツガネを朗々と歌い上げるのを聞き感動する。その強烈な感動が、この分野の研究への動機となったのであるが（五〇三頁）、これを契機とする一九七〇年代の問題発見から三十年。問題意識はぶれることなく、執拗な追究が積み重ねられてきたのである。しかも、その勢いはとどまるところを知らず、本書刊行後も、「民間説話と現実―その様態と生成―南島を視座として―」（『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』二〇―一、二〇〇一年、以降、同論集に連続掲載中。二〇〇四年八月現在、（10）まで掲載）と題し、「ニセ・ユタの話」「鱶に助けられた話」「竜辰の糞の話」「稲福婆の話」「シマダテシンゴ」「トクヌシマヌユントウ」を素材としたさらなる考察が展開されている。

4.

ところで、本書も含め、著者の手になる論著には、いくつかの特色がある。一つは、論文の結論、要約部分においても新たな事例が追加され、これでもか、というように実証的な検証が繰り返される点である（第六篇）。結論部での新資料の提示は、一見、煩瑣との印象を受けなくはない。しかし、これは、著者の手元に、分析してもし尽くされることのない、膨大な資料があることのあらわれであろう。著者の論述スタイルは、論文としての体裁よりも、資料の提示による説得力の増大をねらった結果としてのものなのかもしれない。

もう一つの特色は、著者の文体である。本書においても、またそれ以前の著作においても、その文体は、「のである」「のであった」「ものである」「しかして」「はたまた」を多用する独特なものとなっている。これは、独特のリズム感にもとづく味わいを醸し出しており、評者など、長年の山下の読者にとっては、ある種の安定感すら感じさせるものとなっている。

ただ、文体の問題とは別の次元で、文章中、若干の違和感を抱かされた箇所がいくつかあることも事実である。たとえば、一段落三六行、三一行、二九行などというように、

段落変えなしで延々と続く文章（一六四頁～一六五頁、三一九頁～三二一頁、四四二頁～四四三頁）や、「求めるべきであるという想定をすることができよう」（三二〇頁）、「期待できると考えるものである」（四四六頁）、「持っているといえると考えている」（五〇三頁）などのような表現である。これらは、読者に対していささか冗漫な印象をあたえるものとなっている。

諸学会における近年の過剰なまでの査読体制においては、投稿論文のテニヲハや句点の位置に至るまで細かな指摘がなされ、何度も書きなおしをさせられることが珍しくない。そうした中で育った評者などの世代の研究者にとっては、右のような箇所が気になってしまうのである。しかし、これは本書の本質的な内容とは関係のない瑣末な点であろう。むしろ、膨大な資料を少しでも多く用いて、論証を推し進めてゆこうとする著者にとっては、そのような細かい点に拘泥しているほどの暇はないのであろう。実際、豊富な提示資料にもとづく重厚な論証を読み進めるうちに、当初に抱いた細かな表現上の違和感は、いつしか遠景に遠ざかっていったというのが、評者の読後の感想である。

なお、形式的なところで一点、残念だったことをここで指摘しておきたい。それは、本書には、それまでの著者の著書と異なり、初出一覧が付されていないという点である。第三篇第一章には、付記があり、初出についてのコメントが記されているが、それ以外の各章については、初出の情報が明らかにされていない。これは、本書を立体的に読み込んでゆこうとする場合には、やはり不便である。初出一覧がほしかった。

5.

次に、論証の方法について若干言及したい。

第四篇において、著者は、宮古・八重山諸島の御嶽起源説話をとりあげている。それらの御嶽起源説話は、村落レベルで伝承・共有されてきたもので、これが文献諸資料にも記載されたものであろう。著者は、この説話群の内容―神の示現―の分析から、説話の成立基盤にシャーマニズムを想定している（第一章、第二章）。そして、このことを論証すべく、続く第三章で、宮古島のシャーマンが成巫過程において神話を生成するプロセスを検討し、そうして生成された神話が、いつしか御嶽起源説話などの「民間神話」として伝承されるに至るという図式を構想しているようである。

神の示現を語る神話の内容からの推測として、この構図のもつ妥当性は、かなり高いものと評者も考える。なぜなら、他にこの構図を強く否定するような論理的展開が想起されないからである。ただ、現時点では、論証手続きとして問題がなくはない。それは、およそ次のような点である。

第三章でとりあげられている三人のシャーマン（これに第六篇第二章の追加事例を加えれば四人）は、いずれも村落祭祀の公的神役ではなく、私的民間巫者である。これに対して、第一章、第二章で提示された御嶽起源説話は、村落レベルのものとして伝承され、定着しているものなのではないだろうか。宮古諸島において、村落祭祀の公的神役と私的民間巫者との境界が曖昧な場合もあるという指摘はつとになされている。とはいうものの、少なくとも現状では両者の境界線がまったくないわけではなく、村落祭祀の現場では、公的神役と私的民間巫者との間には緊張関係があることも事実である。こうした状況の中で注目すべき

は、両者の境界がいかなる論理・状況において開放的になり、いかなる論理・状況において閉鎖的になるのか、あるいは、私的民間巫者と村落レベルの神役たちとの間で展開される、神話的世界をめぐる葛藤、拒絶、受容、再葛藤、再拒絶、再受容、定着といった現象は、いかなる論理・状況によって決定されるのか、という点である。

これは、渡邊欣雄（『民俗知識論の課題』）が提唱し、沖縄本島東村で実践しているような、民俗知識の成層性、正当性、拮抗性、伝統性と非伝統性をめぐる動態的実証研究の方法や、あるいは山下自身が『南島説話生成の研究』において採用している説話の生成・伝承動態への注目といった方法によって追究されるべき問題のように思われる。村落レベルでの御嶽起源説話の生成、伝承、定着は、こうした方法による経時的定点観測によってより実証的に論証されることになるのではないだろうか。

もっとも、これは論証の精度をより高めるための課題であって、現時点までの著者の考察が否定されるものではない。現時点での資料集成・分析とそれにもとづく仮説的構図の提示は、まことに適切なのだとすべきである。

6.

著者はかつて、「南島へ、南島から―民俗学への南無菩提のために―」（『国文学―解釈と教材の研究―』二七-一、一九八二年）と題するエッセーで、柳田國男によって「発見」された南島民俗学研究は、柳田を導きとしつつも、「南島内部から南島人の発する起爆力によって、南島の意味そのものを問うことから出発する必要がある。それは柳田の視点とは異なり一箇の小なる島から南島を見る視点と連なるものであり、必然的に南島民俗文化の探求を意味し、柳田の視点の克服として結実する」と力強く述べた。一九八二年になされたこの〈南島民俗学宣言〉は、その後の二十年で蓄積されてきた本書、あるいは前著『南島説話生成の研究』をはじめとする山下のこれまでの業績によって、見事に達成されたといえるのではなかろうか。

さいごに、以前、谷川健一の『南島文学発生論』（一九九一年）が刊行されたとき、山下らは、同書を読み込むシンポジウムを開催し、その成果を『南島の文学・民俗・歴史―「南島文学発生論」をめぐって―』（一九九二年）として世に出した。こんどは、『南島民間神話の研究』『南島説話生成の研究』を読み込み、発展的な議論を展開する研究集会などが開催されてもよいのではないだろうか。このことを提言しておきたい。

（二〇〇三年九月、第一書房、本体定価九〇〇〇円＋税）

（しまむら・たかのり／秋田大学）